



5倍に拡大された赤水図に印を付け、河川の位置を確認する生徒たち（5日、高萩市で）

赤水図で楽しく学ぶ

高萩の中学校 江戸時代の日本地図

江戸時代に活躍した高萩市出身の地理学者・長久保赤水（1717～1801年）が作成した日本地図「赤水図」を使った授業が5日、市立高萩中学校で開かれた。日本地図学会「長久保赤水図専門部会」などが企画し、1年生約70人が地元の人々の功績や地図の面白さについて学んだ。

赤水図は、伊能忠敬（1745～1818年）の日本地図「伊能図」よりも42年早い1779年に作成された。江戸幕府が「秘図」として公開しなかった伊能図に対し、赤水図は多くの

庶民が手に取り、江戸時代後期のベストセラーとなった。地図などの関係資料は2020年に国の重要文化財に指定された。

生徒たちはこの日、同専門部会のト部勝彦主査（58）（日大経済学部教授）の指導のもと、河川の位置の特定に挑戦。上流にある山脈や地名などをヒントに、現代の地図と見比べながら確認していった。

授業を受けた菅野陽介君（13）は「江戸時代にここまで正確な地図を作った偉人がいたことに感動した」と話し、ト部主査は生徒

たちについて、「地図という一次資料を使って今と昔を比較し、情報を導くことができていた」と振り返った。

同専門部会は今後、さらに授業の改善を図り、赤水図を使用した全国的な展開を目指すという。